

令和 6 年 6 月 26 日現在

機関番号：32631

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2020～2023

課題番号：20K10389

研究課題名(和文) 人類学的視野の涵養を目指した外国人患者の事例にもとづくFD・教育手法の開発

研究課題名(英文) Developing teaching methods for Faculty Development employing scenarios created from foreign patient cases to foster anthropology perspectives in healthcare professionals

研究代表者

芦田 ルリ (Ashida, Ruri)

聖心女子大学・現代教養学部・非常勤講師

研究者番号：10573199

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、医学生が得た人類学の知見が卒後も医療現場で共有・発展される環境を作るため医療者の人類学的視点の涵養を目指した教育手法を開発しFDを実施した。FDは事例検討による考察と外国人模擬患者との医療コミュニケーションの実践を組み合わせた。事例はグローバル社会の一員として人々の病いや社会生活を理解するうえで有用だと考え、海外の教育例の研究と国内の外国人患者の最新事例の調査から作成した。調査からは様々な文化的差異と共に、患者と医療者の両方の思い込みや偏見なども明らかとなった。外国人模擬患者との実践は自らの気づきを促し、経験による実践力を養うため事例検討の前後に実施した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

国際的な教育の質保証において医学教育に導入された人類学的な視点が卒後も培われていくためには、直接教育に携わる医療者だけでなく医療現場で協働してゆくすべての医療者が同様の知見を得て深めていくことが重要と考え、医療者の文化人類学FDを行った。外国人患者の実例から作成した事例を用いた事例検討と外国人模擬患者との医療コミュニケーション実践を組み合わせることによって、考察による理論や知識を得るだけでなく、実践による気づき・経験を積み重ねていける教育手法を開発した意義は大きいと思われる。医療現場におけるロールモデルとしての実践力を養う教育手法といえる。

研究成果の概要(英文)：The aim of this study was to develop teaching methods for faculty development (FD) to foster anthropology perspectives in healthcare professionals so that the anthropology-related insights students gain can be shared and enhanced in the clinical setting after graduation. The FD consisted of a case study for discussion followed by practice communicating with a foreign simulated patient (SP). The cases were created through the study of educational programs abroad and a survey of recent cases of foreign patients in Japan, considering that such case studies are a valuable way for healthcare professionals to understand a person's illness and social life as a citizen in a globalized world. The survey revealed, along with many cultural differences, assumptions and biases of both the patients and the clinicians themselves. To promote self-reflection and cultivate practical skills through experience, medical communication with foreign SPs was performed before and after the case study.

研究分野：医療英語コミュニケーション/cultural humility/外国人模擬患者/英語OSCE/多様性

キーワード：人類学的視野の涵養 ファカルティ・デベロップメント(FD) 多様性 事例検討と実践 外国人模擬患者 医療コミュニケーション 社会文化的背景 医学教育

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

医学教育では国際的な教育の質保証において、人類学的な視点から病いや医療を理解する重要性が言及されてきた。2017年3月に医学教育モデル・コア・カリキュラムが改訂されたことによって、カリキュラムの中に明確に医療人類学・医療社会学の視点から病い・医療に関して理解を深める教育内容が導入された。文化的差異を措定し、社会生活との関わりの中で一人一人の患者を理解する視点を涵養するためには、知識を深めるとともに、実際にある事例を検討することによって考察力を高め、患者との医療コミュニケーションを通して関係を築く実践をすることで見識を広めていくことが重要である。

価値観も生活環境も急速に変化していくグローバル社会の中の一員として人類学的な視野を涵養するには、多文化主義の国々での教育例や最新の外国人患者の事例を研究することが有効であると思われる。実際に、外国人患者の文化的差異の調査を行った科研費研究では、既存の文献にはみられないような多様な疾患概念や意思決定要因、医療者の戸惑いがあることが明らかになった。また、知識があっても経験がなければ、実際の患者ケアに生かすことができないことが外国人模擬患者を活用した実践教育の研究であきらかになった(16K08883:研究代表者 芦田ルリ「救急外来での国際コミュニケーション能力向上のための外国人模擬患者参加型実習の開発」)。

人類学的な視点を涵養するこの新たな教育の導入で更に重要なのは既存の知識習得を主とした教育と異なり、個人が実践共同体(医療現場)へ参加する中で周囲の人々との関係性の中で涵養されていく知見であるゆえ、卒前教育で学んだ知見が卒後の医療現場においても実際に周囲の医療者たちによって共有され発展させていける学習環境が作られていることである。しかし、このコア・カリに導入されたような医療人類学を教育として学んでいる医療者は多くない。そこで、医療者の Faculty Development (FD)が必要となる。本研究は、事例検討を通して医療者の多様な視点を養い、実際に外国人模擬患者と医療コミュニケーションを実践することによって経験を重ね見識を深めるFD・教育手法を開発することを目指した。

2. 研究の目的

本研究は、多文化主義の国々での教育例や最新の外国人患者の実例を研究することによって、グローバルな視野から医療者の人類学的視点を涵養することを目指した教育手法を研究する。卒後の医療現場において、医学生が学んだ文化人類学的な知見が共有・発展させられる環境を作るためには直接教育に携わる医療者だけでなく、医療現場で協働してゆくすべての医療者が同様の知見を得て深めていくことが重要となるため、医療者の文化人類学FDを行う。事例検討とともに外国人模擬患者との実践を行うFDによって文化的差異を体験し、自己内省を促し、実践力を養うことを目的とするところに独自性がある。グローバル社会の一員として心理・社会的な背景に配慮し文化的な謙虚さで患者をケアできる医療者の育成を目的とした。

3. 研究の方法

- (1) 多文化主義の国々での医療人類学・多様性を生かす教育・FDを研究。
- (2) 国内の外国人患者の実例調査を医療者への調査票でもって実施。
オリンピック・パラリンピックの指定病院。多数かつ多様な人々が集まるオリンピック・パラリンピックにおける外国人患者の最新実例を研究することは、グローバル社会の中における病いや社会生活を考え理解するうえで有用だと思われ、今後の医療現場で実際に問題となりうる多様な事例を収集するまたとない機会であった。
在留外国人の多い医療機関。文化的問題は妊娠出産や慢性疾患など長期的な治療の中で現れやすいので、並行して、在留外国人の多い市区町村にある医療機関に調査票を送付。さらに機縁法で外国人患者受け入れの多い病院・医療機関に調査票を送付した。また、聞き取りを行った。
- (3) その他、医療通訳者や在留外国人から聞き取りを実施した。
- (4) 上記(1)(2)(3)のデータを定性的に分析し、FDでのケース開発に有用な課題を抽出し事例を作成した。参加者の議論が円滑に進められるように、ファシリテーター用にフォーカスポイントや、異なる医療制度などの事実確認をネットで検索するよう促すなど、質問リストを別途作成した。
- (4) 事例検討と外国人模擬患者との医療コミュニケーション実践を組み合わせたFDを実施。効果を議論内容と検討会後の質問紙にて評価した。

4. 研究成果

(1) 外国人患者の実例調査

症例には、アジア、ヨーロッパ、アフリカ、およびその他の地域からの患者が含まれた。言語の問題は明らかであり、通訳者（人間とアプリケーション）または医療者がコミュニケーションに多大な時間を費やし、時にはフラストレーションを感じて対処するのが明らかであった。時間の概念の違い、宗教的实践に関わる問題、薬に対する考え方や扱いに関わる問題等が見られた。予約患者のみを受け付けている病院において予約なしで来院し診察を強く求めた一部の患者は医療者側からは問題視された一方、受診してもらえなかった患者側からは差別だと主張されたケースもあった。同じ状況が日本人の患者にも発生した可能性のある事例もあったが、患者または医療者の側にいくつかの思い込みや偏見が存在した可能性がある。実際の症例を研究することで、患者の文化的ニーズだけでなく、患者と医療者の両方の思い込み、偏見を明らかにすることができた。また、医療者に投げかけられた様々な質問や患者の行動の背景に文化的差異があり得ることを認識していないために不満を感じている医療者も少なくないことが示唆された。同じ宗教でも個々の患者によって考え方は異なり要望も多様であったゆえ、FDは、様々な社会文化的な文脈を想定しながら、それを固定観念として認識しないように注意して実施した。

(2) FDの実施

上記の研究からFDでの事例を開発し4大学で実施し14名が参加した。参加者中11名は、「異なる文化的背景の患者さんを診たことがある」と答えたが、「異文化に対応するための教育を受けた経験がある」と答えたのは僅か3名であった。当初、事例の検討後に体験として外国人模擬患者との医療コミュニケーション実践を行うつもりであったが、医療者の気づきを促し、効果を図るために事例検討の前後に外国人模擬患者との実践を導入することとした。事例検討前の医療面接では、患者の症状の原因を特定するための質問が殆どで、患者の社会的背景にまで及んで尋ねる医療者は少なかった。事例検討を通して様々なキーワードから文化的背景を議論することによって、患者の日本での生活や不安感、母国での医療事情、薬に対する考え方の違い等を考察することができ、文化により価値観やとらえ方などが異なること、人間関係や境遇を考えずに診療していたこと、日本語の言葉（語）の理解の違いなどへの気づきがあった。また、医療者自らの偏見、勝手な思い込みに関しての認識も見られた。事例検討後の外国人模擬患者との医療コミュニケーションでは、患者の社会的背景や考え方におよんで話を聞くことができ、より人類学的な視野からの診察が行われた。事後アンケートではFDに参加する前と参加した後の変化を自己分析してもらったが、9名がFDに参加したことによって、患者さんの様々な事情にまで及んで考えて対応することができるようになったと回答した（5名は変化なし）。また、文化による違いや個人差による違いなどもあるので、診察とともにシステムとして改革すべきことなど様々ある、との考察もみられ、FDが医療者の人類学的視野の涵養に貢献したことが明らかとなった。

本研究は医学教育に導入された人類学的な視点の学びが医療現場においても共有・発展される環境を作るため、外国人患者の実例から作成した事例を用い、外国人模擬患者との医療コミュニケーション実践を事例検討の前後に組み込んだFDの教育手法を開発した。考察による理論や知識を得るだけでなく、実際に経験することによって、医療現場でロールモデルとして他の医療従事者と共有できる実践力を培った。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 倉田誠
2. 発表標題 医学教育カリキュラムにおける 人類学教育の位置付けと役割
3. 学会等名 日本文化人類学会・医療者向け人類学教育連携委員会「医師とともに考える人類学教育ワークショップ」
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Ruri Ashida, Motoko Kita, Satoshi Takeda, Makoto Kurata
2. 発表標題 Making Educational Cases for Faculty Development to Foster Anthropological Aspects in Healthcare Professionals: An Initial Survey
3. 学会等名 Asia Pacific Medical Education Conference (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 武田聡, 北素子, 倉田誠, 芦田ルリ
2. 発表標題 外国人患者の臨床事例にもとづく人類学的視野の涵養を目指した教育症例の検討
3. 学会等名 日本医学教育学会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 倉田誠, 飯田淳子, 宮地純一郎
2. 発表標題 他者との出会いからより深く学ぶために 人類学的手法を導入した医学教育の試み
3. 学会等名 日本医学教育学会シンポジウム
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 富岡寿英, 志村友理, 北素子
2. 発表標題 在宅看護教育におけるバーチャルリアリティ、ロールプレイングを併用したシュミレーション教育の評価
3. 学会等名 日本看護学教育学会第33回学術集会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Ruri Ashida, Makoto Kurata, Satoshi Takeda, Motoko Kita
2. 発表標題 Faculty Development employing scenarios developed from foreign patient cases to assess and enhance the sociocultural awareness of healthcare professionals in clinical settings
3. 学会等名 Ottawa 2024 Conference (国際学会)
4. 発表年 2024年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	倉田 誠 (Kurata Makoto) (30585344)	東京医科大学・医学部・教授 (32645)	
研究分担者	北 素子 (Kita Motoko) (80349779)	東京慈恵会医科大学・医学部・教授 (32651)	
研究分担者	武田 聡 (Takeda Satoshi) (90343540)	東京慈恵会医科大学・医学部・教授 (32651)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------